

## 6.2 スコラ哲学 – プラトン派からアリストテレス派へ –

### 6.2.1 アリストテレス哲学はイスラムへ

プラトン哲学は、キリスト教 (アウグスティヌス) の後ろ盾を得て、生き延びた。「捨てる神あれば拾う神あり」ということなのだろうか、アリストテレス哲学はイスラムに広まった。理由の詳細は知らないが、

(A) プラトン哲学はキリスト教世界へ、アリストテレス哲学はイスラム世界に広まったのだろう。

と伝わった。たぶん、キリスト教内で様々な路線対立があって、勝ち組がローマに居座って、プラトン哲学を支持した。負け組はイスラム世界へ追われたわけで、アリストテレス哲学もそういう経緯でイスラム世界に広まったのだろう。

東方イスラームは、アラビアンナイトのバグダッドが中心であった。西方イスラーム文化は、南スペインのアンダルシア地方のコルドバを中心地として発展し、10世紀には世界最大の人口を持つ都市となった。当時のイスラム世界は、古代ギリシアやローマの書物から多くの知恵を学び、独自の思想・技術を発展させていた。アリストテレスが信奉されていて、イスラム文化は世界の最先端にあった。

♠ 注釈 6.5. ここでは上の (A) のようなストーリーを採用する。本当のことは知らないし、実際はこんな単純な話ではないだろう。

### 6.2.2 十字軍遠征とイスラム文化の流入



さて、十字軍遠征（1096 年 - 1270 年）の時期、西欧は低迷期（キリスト教支配の暗黒時代）で、

- プラトン流では、十字軍の成果が上がらないので、最先端イスラム文化のアリストテレスを学ぼう。

という空気があったのだと思う。古今東西を問わず、

**求められる人材は、平時の文系、戦時の理系**

ということだろうか。

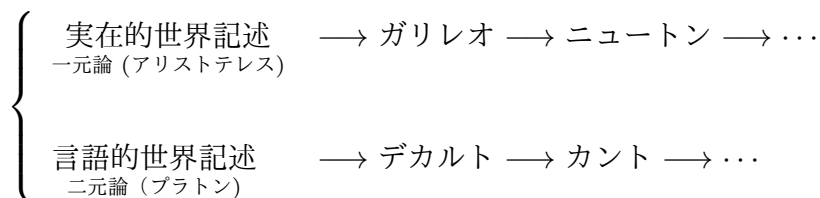
聖地エルサレムへの巡礼や奪回のための十字軍遠征の副産物として、イスラム文化との交流が必然で、アリストテレス哲学が西欧に流入し、プラトン哲学と融合して、スコラ哲学として定着した。スコラ哲学の代表的人物は

- (B<sub>1</sub>) アンセルムス（1033 - 1109）「スコラ哲学の父」、実念論
- (B<sub>2</sub>) トマス・アクィナス（1225 - 1274）「神学大全」；スコラ哲学の大成者
- (B<sub>3</sub>) オッカム（1285 - 1347）「オッカムの剃刀」、唯名論

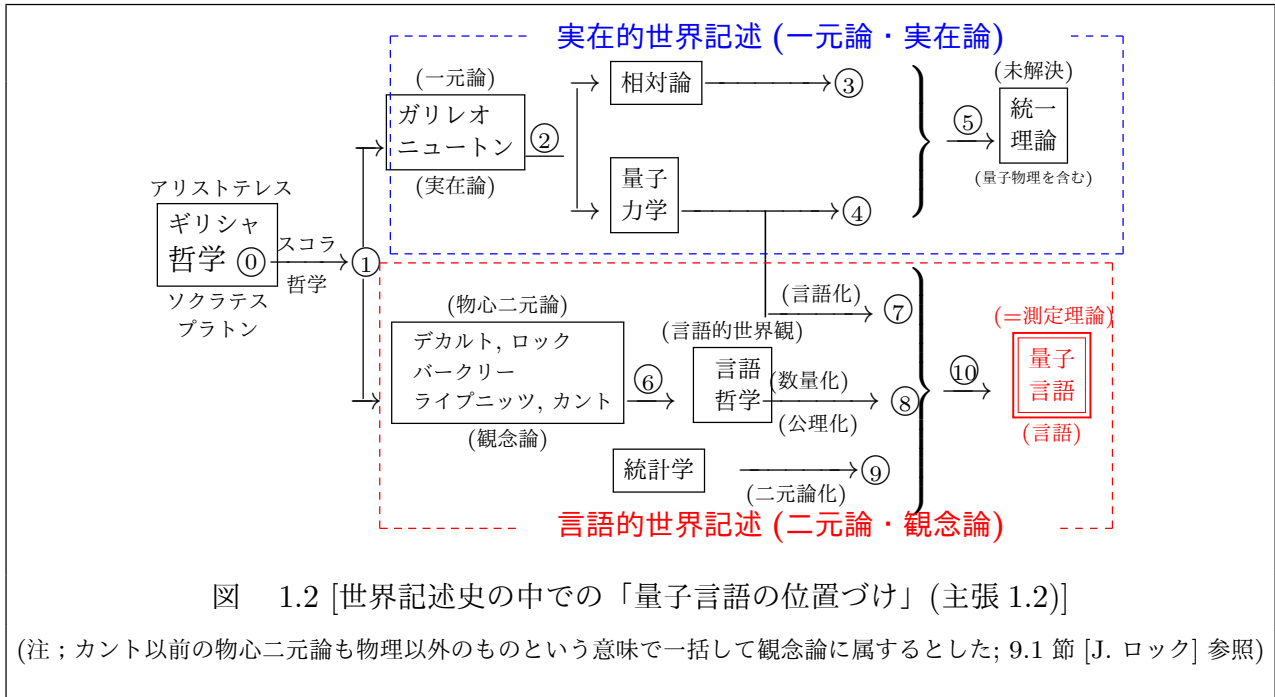
すなわち、スコラ哲学とは

- (#) 最初はプラトン派が多数で二元論的観念論であったが、徐々にアリストテレスの影響が増大して「科学らしく」なってしまう、二元論的観念論を放棄するような方向に向かって、プラトン哲学とアリストテレス哲学の折衷・融合の産物のようになってしまった

である。もちろん、本書的には、この試みは成功するはずがない。なぜならば、



であって、プラトン哲学とアリストテレス哲学は「水と油」で、全く異なる学問体系に属するからである (cf. 主張 1.2[世界記述の発展史])。



しかし、本書のストーリーとしては、

- この試みの中で、プラトンのイデア論の不備が露わになって、これがデカルトに繋がった。

と強引に結論する。

また、十字軍遠征の副産物として、忘れてはならないのは

- インド発祥の「位取り記法 (ゼロの発見)」

であり、次節で述べる。